



岡田小学校 令和8年度 学校だより

9月1日発行

ふ れ あ い

[学校の様子→](#)



子どもが通いたくなる岡田小に

2学期が始まり、子どもたちの元気な声が学校に戻ってきました。学校は、子どもたちのがんばる姿がよく似合います。引き続き保護者・地域の皆様には、学校教育に対しまして、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

さて、2学期は「**収穫の秋**」です。オカリニックをはじめ、さまざまな行事を通して、子どもたちが学級・学年の絆を深め、集団としての成長が期待できる時期です。自分たちで掲げた目標を達成するために、努力すること、協力することができる子であってほしいです。

「努力」、聞き慣れた言葉です。「協力」、聞き飽きた言葉かもしれません。改めて辞書を引いてみると、努力とは、「**力を尽くして励むこと**」、協力とは、「**力を合わせて事にあたること**」とあります。力を尽くすには、成し遂げたいと思う目標が必要です。力を合わせるには、共通の目標をもつ仲間が必要です。「**努力は足し算、協力はかけ算**」と言われますが、チーム岡田で最高の景色を見られるよう、努力と協力を大切に取り組んでまいります。

そのためには、子どもたちの「**学校が楽しい**」がベースになくってはなりません。学校が楽しいと思うのは、まず、友達や先生など人とのつながりがよいこと。そして、わかる・できる・認められることで成長が実感できること。そして、自分の居場所があるという安心感があること。この3つがそろって、「**学校が楽しい**」と思えます。学校は、単に学力だけを伸ばそうとしているわけではありません。人とのよりよいかかわりを通して、安心できる居場所と挑戦できる機会を大切にすることで、「**学校が楽しい**」とを感じるのだと思います。

2学期は、子どもたちがもっと「**学校が楽しい**」と感じられるように、以下の3つを大切にしたいと思います。

①思いやり算(人を笑顔にする算数)を繰り返し取り組んでいきましょう。

- ・「+」…助け合うと大きな力に
- ・「-」…ひき受けると喜びがうまれる
- ・「×」…声をかけると一つになれる
- ・「÷」…いたわると笑顔は返ってくる

②自分らしく学び続ける姿を大切にしましょう。

- ・どうしたらできるようになるかを考えてみよう。
- ・自分なりにやってみよう。
- ・うまくいかないとき、友達の考えを取り入れてみよう。
- ・より高みを目指し、もっと努力してみよう。

③困ったとき「助けて」と言えるようにしましょう。

- ・だれだって、できないこと、わからないことがあります。
- ・「できない」って怒るのではなく、どうしてほしいかを伝えてみよう。



正しく恐れて災害に備える

7月28日に最大震度7の非常に激しい揺れを観測した熊本県では、人的被害をはじめ、建物の倒壊、火災や道路の損壊など、大規模な被害が出ました。この大地震でライフラインが寸断され、今なお厳しい生活を送っている人たちがいます。

これまで、記憶に残る大地震が3つありました。1995年1月17日の阪神淡路大震災、2011年3月11日の東日本大震災、2024年1月1日の能登半島地震です。

阪神淡路大震災では、震度7の大地震で家屋等の倒壊と大規模火災が起き、6,437人の死者・行方不明者が出ました。高速道路が倒壊しバスが落ちかけている映像や町が大火災になった映像は、衝撃的でした。

東日本大震災では、震度7の大地震で津波や液状化現象が起き、22,312人の死者・行方不明者が出ました。私は、そのとき東京で勤務しており、非常に激しい揺れで恐怖を感じたことを覚えています。勤務先が避難所となり、帰宅難民の受け入れのために、夜通し対応しました。このとき、携帯電話はつながらず安否確認ができなくなり、スーパーやコンビニから、米、トイレットペーパー、電池などがなくなりました。一方、「釜石の奇跡」として語り継がれている子どもたちがいます。これは、大震災が起きても、釜石市の小中学生はほぼ全員が津波から避難し、生存したということです。周辺地域では多数の犠牲が出た中で、子どもたちが自ら判断し、高台へ素早く避難しました。釜石市の防災教育にある津波避難三原則「想定にとらわれるな」「最善をつくせ」「率先避難者たれ」を忠実に実行した結果、津波から命を守ることができたのです。

能登半島地震では、震度7の大地震で家屋等の倒壊、地割れ、津波が起き、750人の死者・行方不明者が出ました。このとき、プライバシーのない避難所のあり方や、学校の教室が避難所となり授業の再開が大幅に遅れたことが問題となりました。また、断水が続く中でも学校の再開が急がされ、教職員が出勤の強要を感じたり、子どもたちが安心して過ごせない学校で無理をさせたりしたことに心配を抱く声がありました。私は、そのとき富山県氷見市に災害ボランティアとして参加し、被災者に対して、「寄り添う」とはどういうことなのかを考えさせられました。ボランティアでは、倒壊した家屋等のがれきを運び出す作業を行いましたが、被災者にとっては、がれきではなく思い出であるため、「焦らず・急がず・穏やかに」活動するよう言われたことを覚えています。

東日本大震災では、多くの人の命が犠牲となりました。この年の世相を表す漢字が「絆」でした。日本人は大災害の中でも、人への思いやりを忘れないと、日本人の心を世界中の人が支持してくれたのを覚えています。帰宅難民となり、夜通し家まで歩いて帰らなければならなくなった際、「トイレのご利用どうぞ」と看板を掲げたり、物が散乱するスーパーで、落ちている物を拾ってレジに並んだりする姿がありました。また、避難所で「これからどうなるんだろう」と嘆くおじいさんを見て、横にいた高校生が、「大丈夫、大人になったら僕らが絶対に元に戻します」と言って、背中をさすっている姿がありました。

日本は、何度も何度も大変な被害を受けましたが、人々は懸命に知恵を絞り、決して復興をあきらめずに努力し続ける姿に、胸が熱くなります。

災害は、いつ、どこで、起こるかわかりません。私たちは、正しく恐れて災害に備えることが大切です。岡田小では、防災教育を通して、命を守る行動、みんなと一緒に生き延びる行動を、子どもたちと一緒に考え、実際に行動できるようにしていきたいと思います。

(校長 小嶋 正嗣)

